

伊勢湾地方から見た近江系土器

—とくに弥生中期をめぐっての断想—

石 黒 立 人

I

畿内地方にはあまり見られないある特徴をもった土器が、近江地方の土器であるとして「近江型」あるいは「近江系」と呼称されるようになってからすでに久しい。にも拘らず、そうした名称付与以後の年月とは裏腹に、「近江系」あるいは「近江型」土器の何たるかは、未だもって茫漠とした感がある。それは、近江地方の土器としての「近江（系）型」土器と、畿内地方とは異質な型式学的特徴をもって近江地方に多く分布する土器としての「近江（系）型」土器が、区別の曖昧なるままに一括されてきたことに因る。すなわち、製作地の問題と、そうした土器を作り出した集団の技術的・精神的基盤の問題が峻別されなかったのである。換言するなら、地理的区分のアプリオリな適用の妥当性の評価と、地域性の歴史的把握ということ。このことが、土器を理解する上で最も重要であるにも拘らず、便宜性を優遇したためにあまり考慮されることがなかったのである。

ところで最近、弥生時代中期の「近江（系）型」土器について幾つかの論述がなされている。従来見ることのなかった滋賀県の研究者によるものもある。以下、そうした諸論の比較検討をとおして、また伊勢湾地方で出土したいわゆる「近江（系）型」土器と思われるものを取り上げ、問題の一端を明らかにできればと考えている。（以下、近江系と単純表記する。）

II

伊勢湾地方で出土する近江系は、甕の場合外観上から大きく2類に分けることができる。すなわち、口縁部は厚手で二段口縁といった形状をなして上端が波状（「山形状口縁」とも呼称される）をなすもの—A類、口縁部が単に受け口状をなすもの—B類である。壺については、近江地方での型式確定ができていない現状において積極的に提示することはできないが、とりあえず議論に供するために敢えて2、3挙げておく。

さて、甕A類は、伊勢：納所遺跡・亀井遺跡、尾張：朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡、などで出土し、共伴土器は中期2を中心とする。口縁部の屈曲部分外面の稜には連続した刻みを、

波頂部には単独の刻みを施す例が多い。また、紋様は口縁部直下外面に直線紋といった趣の横ハケメ、口縁部内面にハケメと同一原体による波状紋が施される。それに対し、甕B類は、上記遺跡のほか伊勢：永井遺跡・起A遺跡・北端遺跡、尾張：大瀬遺跡、などで出土し、中期3に伴うものと中期4に伴うものがある。前者はやや厚手であり、口縁部直下の紋様も直線紋（横ハケメではない）が主のようである。しかし、後者になると全体に薄手で口縁部もきっちりした受け口状をなす。紋様も直線紋だけでなく刺突紋（列点紋）や波状紋が加わり複雑となる。以上のように大雑把には、A類→B類という変遷を考えることができる。

ところで、甕B類については問題となる点がある。伊勢地方においては近江系甕から受け口状口縁部のみを取り去ったという状況の形態・紋様をもつ甕がかなりの頻度で出土しており、両者の違いをどう考えるかが問われるからである。中期3に属す例は未だ十分ではないが、中期4に属す例は亀井遺跡を始めとする津市周辺の諸遺跡や鈴鹿市周辺においてかなりの資料集積をみているし、散発的には伊勢全域において出土しているという状況である。中期3にあって尾張地方との関係が強いとはいえ近江地方に隣接する伊勢地方であれば散発的に出土することもありうるが、中期4では瀬戸内・畿内系土器群の波及経路からいって近江地方からの流れは主要であろうから、そこにおいて何故受け口状口縁部を持つ甕＝近江系では無くして受け口状口縁部を取り去った〈擬似近江系〉が高頻度に展開するかが問題である。ここで今結論をだすには至らないけれども、近江地方内部か近江・伊勢の境界付近、あるいは伊勢地方内部に近江系と直接しないセクションがあって、そこで甕について独自に情報変換—この場合は消去—が行われそれが広まった。つまり近江系自体に移動を促す要因がなく瀬戸内・畿内系の動きとは同調しなかったのかもしれない。見方を換えるならば、中期4に至り緊密の度を増し情報変換が非常に限定されて部分的にしか行われないほど近い関係を取り結んだ—固定した—ということであろうか。（故に大和地方に繋がらないことだけは確か。）

上記甕分類には加えなかった、単純に外反する口縁部の端面（口唇部）を突起状に拡張するものや口縁部内面に波状ハケメを施すものは、伊勢：東庄内B遺跡、尾張：朝日遺跡、阿弥陀寺遺跡、などで出土しているけれども、私は今これらを（かつて私も行ったのであるが）限定的に「近江型」と呼称することには賛成できない。この特徴をもつものは近江地方に固有かというとは決してそうではないようである。口唇部に単独圧痕あるいは2個一対の圧痕を加える例は伊勢湾地方においては中期1から出現するし、さらに口縁部内面に波状紋を施す例も同様、伊勢湾地方との関係で理解する余地がある。

口縁部内面紋の出現は、いわゆる櫛描紋という点でみると、条痕紋系土器とくに水神平式壺や岩滑式深鉢に先行現象がある。しかも、前記内面波状紋は調整具としてのハケ原体によって施紋されるのが通常であり、この点も条痕紋系土器の手法と極めて共通している。また、体部外面の直線紋状の横ハケメも同一原体によることは注目して良い。(とはいっても、甕形としての畿内との共通性は否定できないところであるが。)

壺はよくわからない点も多いが、私がこれまで「伊賀型」としてあつかつてきたものの中にあるかもしれない。実際、「伊賀型」と呼称しながらその実態はほとんど不明と言うしかないものであり、その資料的な不十分さからまとまった考察をくわえることのできなかったという否定面がある。従って、今後資料の集積をみて体系だてる必要を感じる。ここでは、そうした現状を鑑みて、若干見通し的に述べておこうと思う。

伊勢地方では、中期2になると貝田町式細頸壺とは別に「伊賀型」と呼称したような受け口状口縁部をもちやや頸部の長い壺(太頸と細頸がある)が目立つようになる。伊勢地方は尾張地方との関係も強く、中期1以来緊密な情報交流のあったことをうかがわせるが、こと壺の一部にあっては独自性を表出し、尾張地方にはない—貝田町式壺とはことなる—受け口状口縁壺を採用するのである(「採用」といったのは、受け口状口縁壺の成立はいわゆる朝日式土器分布圏ではなく、岩滑式土器分布圏で行われるからである。従って、そこにスムーズな型式変化は認められないのであり、新しい形態の波及あるいは採用というとらえ方になるのである)。この点では、近江地方の受け口状口縁壺も同じであり、伊勢と近江のどちらか一方から一方ということではなく、どちらも同じようにある地域から影響を受けたと考えるのが妥当であろう。すなわち、尾張地方を囲んで三河、伊勢、近江、美濃において類似した特徴をもつ土器が分布することを見れば、である(現れ方にはかなりの差がありとても同じ部類に見えないようなものもあるが、相互に比較すれば内実において近似性の高いことは十分理解できると思う。伊勢でみられる頸部のやや長い壺の肩部の段は重要)。

いずれにしても、類似点は決して表面的ではないので、広範囲に比較検討するなかで近江系の範囲を縮小する必要があるかと思う。と言うより、近江系についての議論が、その範囲を問題外として進められている現状にあること。換言するなら、現状の拡大しきった近江系土器の範囲に対して、いま一度再検討をする必要があること。このことを抜きにしては議論の深化は望めないと思うのである。さらに重ねて言えば、近江系について検討するのに、その内部にあって行うのと外部にあって行うのとでは、結果の見え方も大きく違ってくるだろうこと。極めて、重要な点と思うが。

III

ここでは、国下多美樹・浜崎悟司両氏の論考に焦点をあて、問題の一端を提示したい。

さて、国下論文であるが、考察の進め方はオーソドックスであり、資料についても比較的細かくあたっているようである。しかし幾つかの問題点がある。

(1) 近江型甕の規定方法が曖昧である。『土器集成』の佐原分類を前提とし、全く無批判に範囲を設定している。更には、論述の進行から言って初めにもってくるべき「近江系要素の抽出」を後にもってきている。従って、結論的には従来の近江型甕論を踏襲したものとなっている。

(2) 弥生中期～後期の地域間交流を扱っているにしては、近江型甕の型式変化に対する認識及び分類の時間性が不明瞭である。

(3) 『近江型甕についての一試論』というテーマに規定されたわけでもあるまいが、壺についての認識が甘い。伊勢湾地方の資料をほとんど参照していない。

それでは、浜崎論文はどうであろうか。国下論文に比べて論点はやや明瞭と言えるけれども、やはり次のような問題がある。

(1) 「近江型甕」と「近江的特徴」(口縁端部の押圧、口縁部内面の波状ハケメ、頸部外面の横ハケメ)を区別したことは評価できるとはいえ、「近江的特徴」の位置づけは依然曖昧となっている。本当に近江を規定する特徴であるのか。

(2) 近江型甕口縁部の分類の妥当する空間的範囲がはっきりしない。近江地方内において地域的に限られるのかあるいは一般化できるのかどうか。

(3) (2)に係わり、本稿でも重要な点があるが、井藤暁子の指摘した伊勢納所遺跡出土甕の評価について「近江に一般的にみられるものではなく、ましてその初源的形態をとっているとは考え難いこと」は事実としても、近江系に含まれないのかどうか。

(4) 地域的な境界設定にまで論を進めているわりには、様式的な視点に欠けるのではないか。すなわち、壺抜きである。いったい甕のみで区分できる境界とはこういった性格のものなのか。甕のみで地域性を強調することは危ういのではないか。

以上両氏の論点のうち問題となる点の一部を抽出してみたが、通して言えることは、「近江型甕」について語っていながら、その本質把握へのアプローチが不十分である。様式とは切り離された著しく不安定な存在としての「近江型甕」をすでに明白な事実とした上で、極めて表面的な土器論に終始していると言わざるをえないのであり、その根底には近江系=畿内系という意識があるように思える。その点では両氏ともとりあげていないが、遺跡調査紹介の小文ではあるとはいえ、岩崎直也による堤ヶ谷遺跡出土土器の分析を十分評

価すべきであると考ええる。(研究史も大切ではあるが、尊重しすぎればかえって拘束されることにもなりやすい。)

IV

近江系の型式的特徴は、個体の移動を考慮するなら、単に分布状況で決まるものではない。時間的な前後の型式組列があるかないかが重要であろう。つまり、ここでは口縁部の形成過程を追うことができるかどうかにかかっている。かかる条件の有無を判断材料として考えるならば、波状及び受け口状口縁部をもつ「近江甕」の生成については近江地方以外にはありえない。多少の境界付近での情報交流があり、当該土器に関する情報が流れたとしても、それは周辺の偏差として処理されるにすぎず、中心を変動させるものとはならない。

しかし、浜崎の区別した「近江的特徴」なるものは、個別的な手法差を除いて内面施紋という点から大局的にみれば、極めて分布範囲が広く、畿内東部周辺を北(能登・加賀)から南(伊勢・三河・遠江)へ帯状につながっている。そしてこの範囲はまた受け口状口縁部をもつ壺の分布域でもあることは、ともかくも両者の間に少なからず関係のあることを示している。

このことは岩崎直也も指摘しているように水神平式を含めた条痕紋系土器との関係において理解すべきものと考えられるのである。その意味で「近江的特徴」という名称について仮であると断ったとしても、用語の不十分さは拭えない。ではどういった範疇で枠付けしたらよいのか。とくにこれといった用語は用意していないが、敢えて言えば、〈伊勢湾・北陸の特徴〉とでも言ったほうが「近江的」に比べればより妥当性はあるかと思う(あるいは、〈弥生文化中部弧状帯〉という地域的枠組みを設定するのもどうか)。

ところで、私の乏しい知識をもとに近江系を考えても、従来行われてきたような畿内地方との対比(多くの場合は、畿内を基準としてそれに当て嵌めていた)に果たしてどれだけ有効性があったのであろうか、私は疑わしいと思う。つまり、近江系という用語の使われ方からみて明らかなように、そこには畿内様式を大枠とした上での地域区分といった意味があることは否定できない。畿内的認識基準から離れて対等に近江系をとらえるにはどうしたらよいのかといった点は何等考慮されていないといったら言い過ぎであろうか。もちろん、研究の取っ掛かりというのであれば十分に意味はあるが、すでに年月の経過した今、同じように使うことにためらいはあるはずである。

畿内様式は、個性を持たない(あるいは過少評価でしか見ようとししない)からこそ、(ある意味でアプリオリな)地域区分によって一定枠内で個性を浮き彫りにしようとした。それに対し、近江地方の土器は見るからに個性の塊であり、素直に土器と対話すれば自ずか

ら様式の姿を現すはずであった。しかし、研究の方向は畿内の延長であったばかりに個性を見落とした。と言うより個性を背後に隠したと言うべきか。畿内の思考の枠に嵌まらないものを除外したことが、近江地方の土器を分からなくしたのではあるまいか。

V

近江地方の土器の重要性は、指標的にみるならば、こと土器に止まらず、恐らくは歴史的な範疇にまで及ぶものであるかもしれない。土器に限って言えば、中期以来の独自性が古墳時代の初めまで維持されること、その独自性も自己完結することなく周辺に対して何等かの形で影響を与えていること等、地域としての在り方は対畿内のレベルにおいて理解することができると思う。あるいは、畿内を規定するものとしての位置に「近江」があると見るのは肩入れしすぎであろうか。

(1988. 1. 10)

引用文献・参考文献

- 国下多美樹 「近江型甕についての一試論」『長岡京古文化論叢』 中山修一先生古希記念事業会編 1986。
 浜崎悟司 「弥生土器甕にみられる地域色」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要1 昭和60年度』 滋賀県埋蔵文化財センター 1987。
 岩崎直也 「湖東における高地性集落の調査」『滋賀文化財だより』 No68 財団法人滋賀県文化財保護協会 1982。
 三重県教育委員会 「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』 1970。
 " 「亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』 1973。
 " 「辻の内遺跡」『昭和50年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』 1976。
 " 『納所遺跡』 1980。
 " 「起A遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』 1983。
 四日市市教育委員会 『永井遺跡発掘調査報告』 1973。
 愛知県教育委員会 『朝日遺跡』 1982。
 財団法人愛知県教育サービスセンター 『埋蔵文化財発掘調査年報』 I～III 1984～1985。
 松本洋明 「弥生土器の考察」『末永先生米寿記念献呈論文集』 1985。
 拙稿 「伊勢湾周辺の弥生中期土器に関する覚書 '86」『東日本における中期後半の弥生土器』 北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究会・群馬考古学談話会 1986。(時期区分は本稿による)

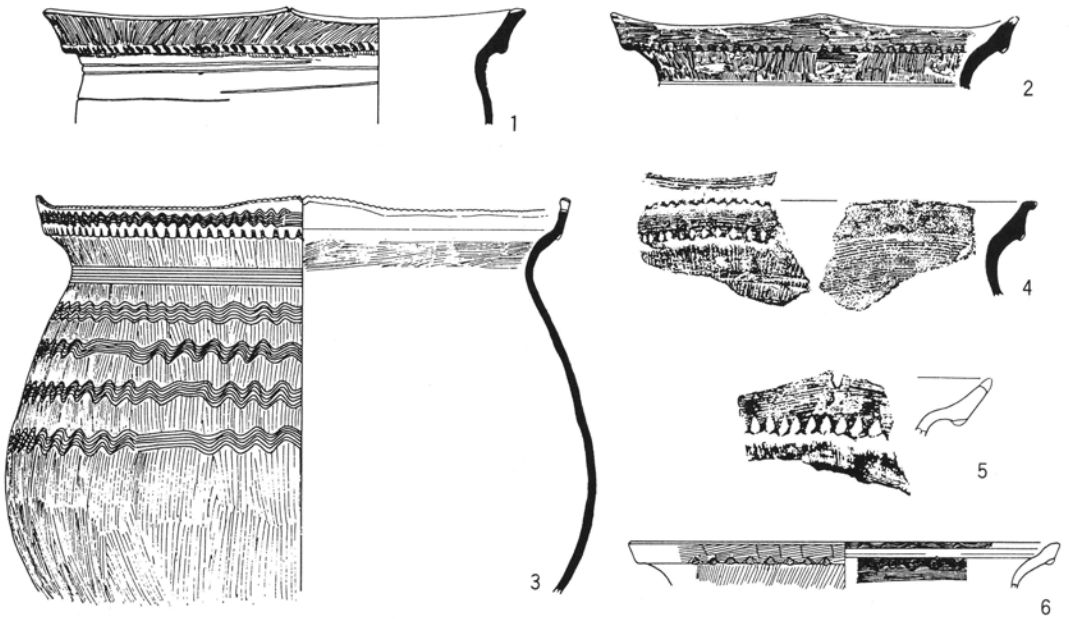


Fig.1 近江系甕A類 12 納所 3・4 亀井 5 朝日 6 阿弥陀寺

資料解説

Fig.1は近江系甕A類、Fig.2は肩部に横ハケメをもつ甕である。6は破片からの復元であるため口縁部が直線的になっているが、他と同じ物であると思われる。口縁部内面へ波状紋を施す例は余り見られない。3を除いて1～6は中期2に属す。3は中期3か。Fig.2の7は中期2、他は中期2～中期3。11・12は肩が丸みを帯びてやや張り出しており、新しい様相を示す（中期3か）。伊勢地方に固有の甕と思われる。口唇部の面が特徴的。

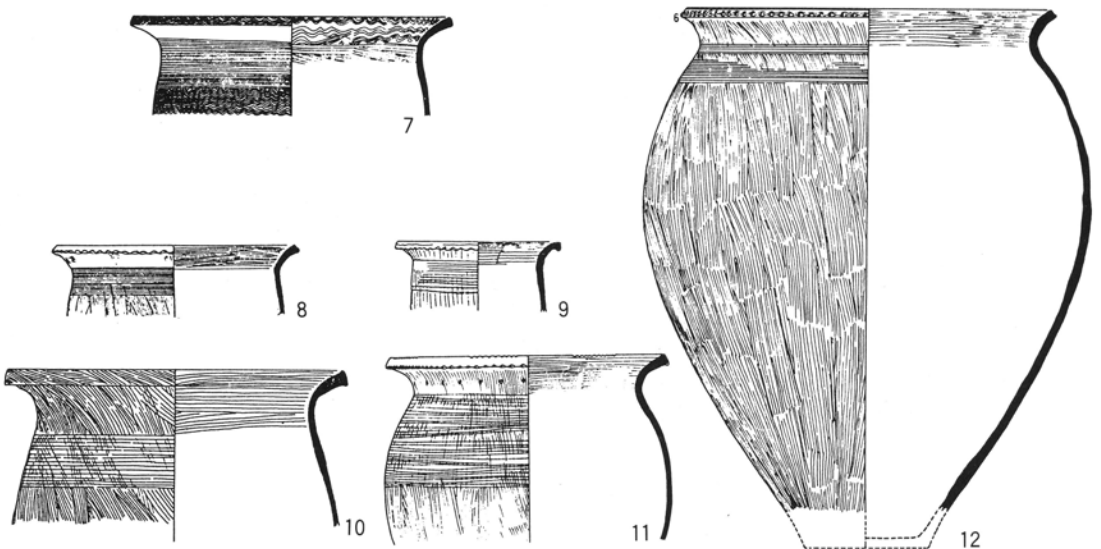


Fig.2 肩部に横ハケメをもつ甕 7・11 東庄内B 8～10 北切 12 地藏僧

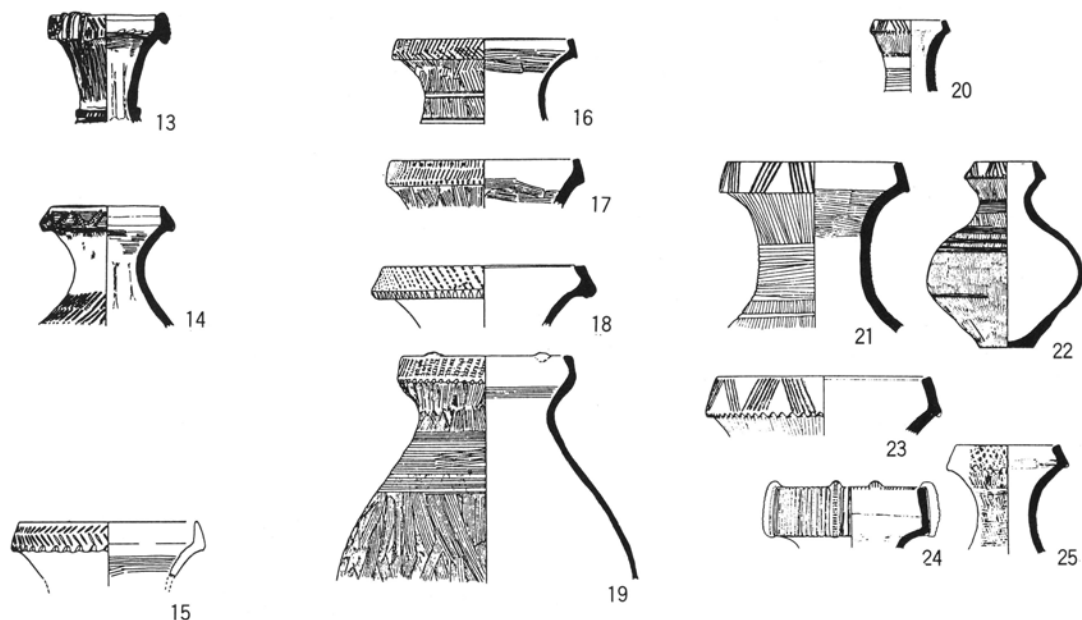


Fig.3 受口状口縁壺 13・14 納所 15 平田 16～19 北切 20～25 東庄内B

Fig.3は中期2の受け口状口縁壺、Fig.4は中期3（～中期4）の受け口状口縁壺。受け口部外面稜に見られる連続した刻みは、岩滑式の刻み突帯に系譜を辿ることができる。棒状浮紋も同様である。19は口唇部が部分的に突出しており、岩崎直也のいう近江系に類似する。13・15・16・18の受け口部外面の列点紋あるいは刺突紋は北陸地方にも類似例がある。

Fig.4の26・27・31は前者の系譜を引くが、28～30は他からの影響を受け部分的に変換している。しかし頸部下の刺突紋は消去されていない。

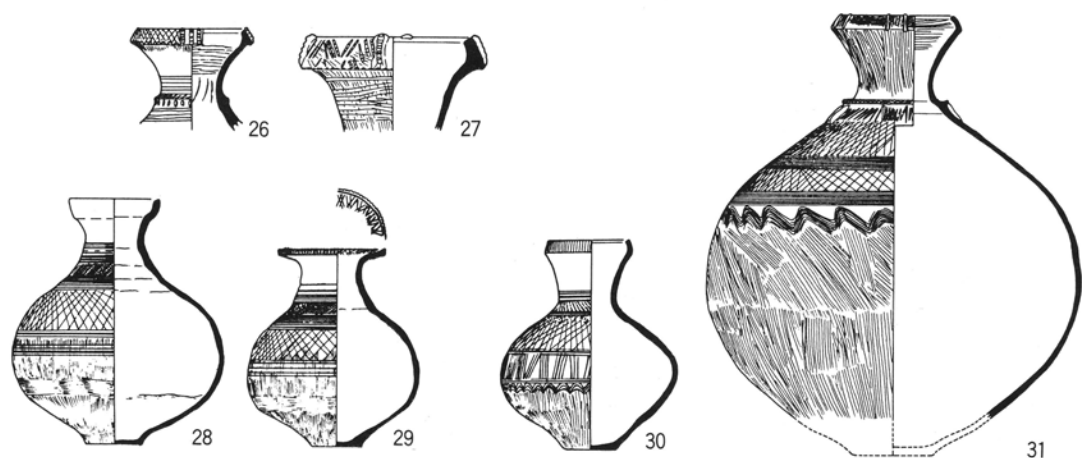


Fig.4 受口状縁壺及びその他 26～31 地藏僧

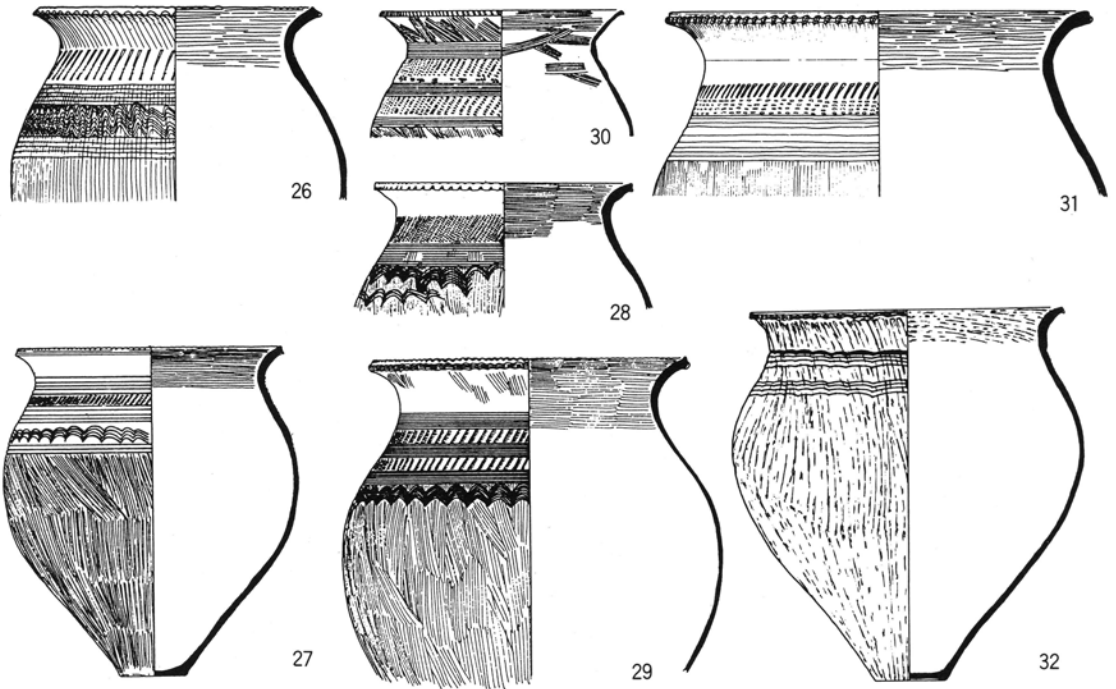


Fig.5 擬似近江系甕 26・31 辻の内 27～30 亀井 32 永井

Fig.5は32が中期3。他は中期4でいずれも擬似近江系甕。肩部の列点・直線（横ハケメと言うよりは紋様）・波状の各紋様の組み合わせのうち、直線と列点は基本となるようだ。口唇部の刻みも同様。Fig.6は33・34が中期2に属し、近江系甕B類の祖型になる。先に紹介したA類とは別系統（地域差）ということになるのであろうか。35～38は近江系甕B類としたもので、すべて中期4に属す。列点と直線の基本施紋に波状紋を加えるという在り方は、Fig.5・6の両者の系譜的關係が密接なことを物語っている。しかし、筆者の管見に上った限りでは、近江地方において擬似近江系の出土例はなさそうである。とりあえず、源流は近江にあると言うべきか。いずれにしても、甕を賑々しく紋様で飾り立てるのは縄文的ではないか。

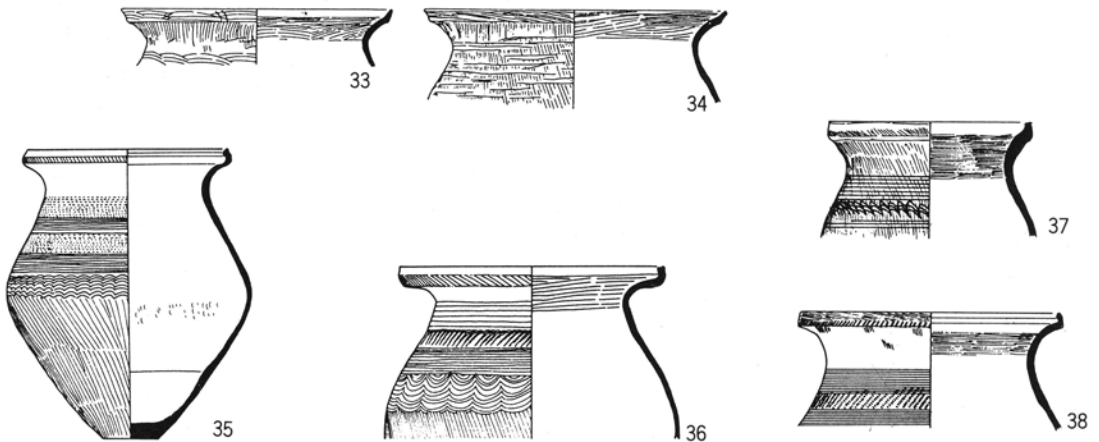


Fig.6 近江系甕B類 33～36 北切 37・38 亀井

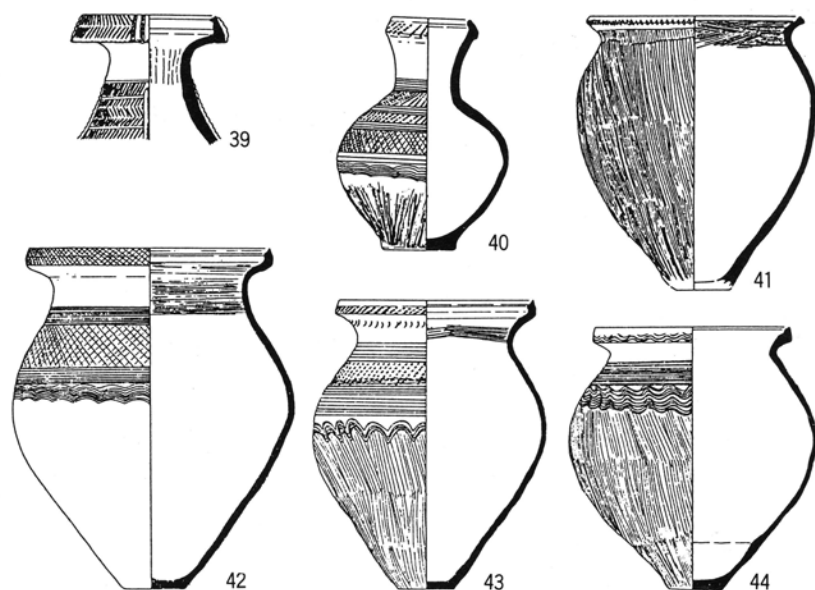


Fig.7 起A遺跡S B-05出土土器

Fig.7は三重県鈴鹿市起A遺跡SB05出土の土器である。中期4に属す。40はFig.4のグループに近い。42～44は近江系甕B類である。39はあまり類例のないものであるが、Fig.8の45を参考にすれば、大きくはFig.4のグループに入る。しかし、形態的に見て頸部の長頸傾向は東日本的な特徴と言えるのではないか。特に、頸部から肩部の段に注意が引かれる。Fig.8は全て尾張地方出土の土器である。47は要素がかなり消去されているので近江系甕の範疇から外れるが、受け口状口縁部と肩部の横ハケメ（直線紋というには躊躇する）に見られる共通性はどう見るべきか。あるいは、尾張地方で特徴的な内面ケズリ甕に受け口部を付加したものなのだろうか。

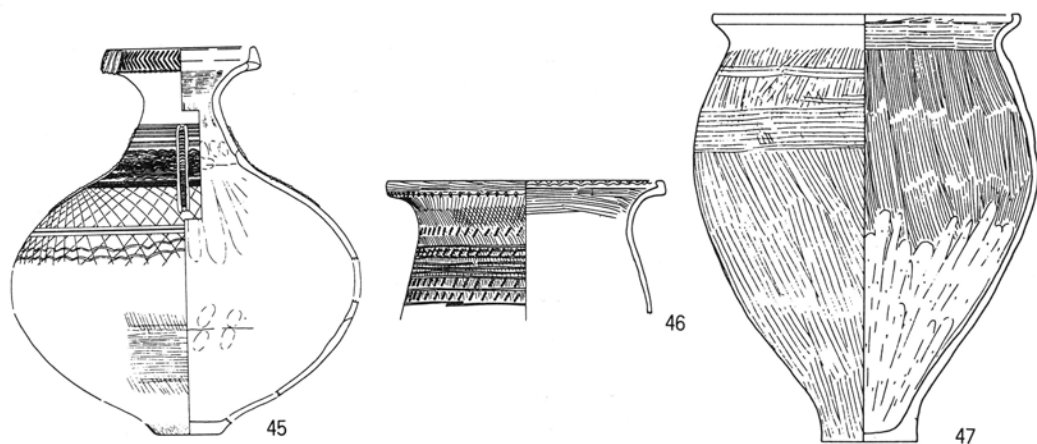


Fig.8 その他 44 阿弥陀寺 45 大湊 46 朝日